

昭和八年四月

昭和八年四月 (第392号)

警察協會雜誌

昭和十三年六月二十二日 第三種郵便物認可
昭和八年四月一日 (毎月一回一日発行)

巡查身分保障令發布に就ての所感

松井茂

帝國今後の國際關係

筒井潔

平和の都「ジュネーブ」の騷擾

石井錦樹

警察署長の地位向上に關する建議案

松尾孝之

海嘯罹災地視察の前後

原仙吉

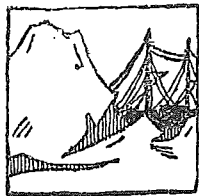
巡查懲戒令解説

石井政一

第三百九十二號

財團法人警察協會發行

昭和八年四月五日
警察協會
寄贈



海嘯罹災地視察の前後

警保局 原

仙 吉

去月三日は桃の節句、古來優雅なる雛祭の日として全國の子女がその日の來るを樂しみ待つたであらう。にも拘らず、突如太平洋の彼方に巻き起つた狂瀾怒濤は、忽ち三陸の沿岸に押し寄せて數千の人命を奪つた外、船舶家屋の被害幾萬暴狀の限を盡すといふ呪ふべき災厄の日であつた。私の現場視察は罹災地中の一部分に過ぎないが、佐藤主筆の御慫慂に依りこゝに狀況の一端を報告することゝした。

一、廳府縣聯絡警察

電話の機能

あつた。暫くの後岩手縣釜石町に於ける火災、海嘯を始めとして、一報毎に慘禍の雪ならぬを齎される。廳内は果然緊張した。警務課長から「事務官に隨行して現場に急行視察せよ」といふ命令が下る。汽車時間を調べた處、どうしても現場への到着は翌日の午後になる。急遽難に赴くべき警察としては如何にも、もどかしい。何とか方法はないものかといふ職責上の飛んで行き度い氣持は文字通り具體化して、遂に飛行機利用といふことに決し、東京に於ける空の港、羽田飛行場に直行した。本省から災害地視察の爲、特別仕立の飛行機を利用する事なども、時代の然らしむる當然の現象ではあらうが、從來餘りその例を聽かず恐らくは今回を以て嚆矢とするであらう。視察上の都合で途中私だけ陸行することゝなつたが、増田、石井兩事務官塔乗の素晴らしい「フオツカー」旅客機が爆音勇ましく離陸し

三月三日午前二時二十五分頃より凡そ五分間ばかり、東京地方にも近頃珍らしい地震があつた。敢て地震加藤を氣取るわけではないが、役所の側近くに居る責任上、急ぎ服を着込み、深夜の街上を駈足で登廳し、眞先に電話室へ飛び込んだ。電話係の柴山君は受話器を兩手に握つて一生懸命でやつて居る。幸、電話に故障は無い。地震後十分も経たぬ間に「西は岐阜縣感じて滋賀、三重感せず、大阪、勿論異狀なく、愛知、静岡微弱、神奈川、山梨、埼玉、栃木、群馬、茨城、千葉、福島、岩手、青森何れも強震、どうやら東北が本場らしい。」これだけの要領を掴

む事が出来た。偉なるかな廳府縣聯絡警察電話の機能、聽て一廳三府四十三縣に普及して一時に全國を電話口に呼び出し中央より同時手配の出來る様にしたいといふ當局の理想が達成されるのも近い將來のことであらう。吾等は非常事變に當面する毎に警察通信網のより完全を希望すること切なるものがある。

二、災害視察に航空機

の利用

最初の内は各府縣共「差當り被害無之模様」と異口同音の報告であつた。吾等は一應安心した。しかもそれは束の間で

て、春霞棚引く東京灣の彼方に機影を放したのは午後零時七分。機上よりの視察を遂げられた事務官は、即日歸廳復命正に「スピード」時代である。

三、地震學の權威國富博士

飛行場から引返して青森行の急行に乗り込んだ私は途中、列車中に於て我國地震の泰斗、中央氣象臺技師國富博士を發見した。先生は昨年の十一月大日本消防協會主催東北六縣に於ける防火運動の際に恰度岩手縣へ派遣の講師として講演に赴かれた。その際にも私は青森縣への講師大塚貴族院議員の隨行を仰付かつて同地に向ふ途中同じ汽車中で御目にかかつたことがある。當時國富先生の隨行は當課の宮城君であつた。あの際にも先生の御講演中には矢張り御専門の立場から三陸地方に於ける地震の話や海嘯について

居た。不幸にして僅か三四ヶ月後に警告の海嘯はやつて來た。學術上の御調査に現場へ向はれる先生と再び同じ列車中で御目にかゝるのも不思議なる奇遇、私は唯一回の御面識しかないけれども場合が場合丈けに、先生は汽車中親しく災厄の原理について御示教下さつた。海嘯被害地視察に赴く途中、日本一の専門學者から豫備知識を授けられるなどは願つてもないところと感激して拜承した。その大體の要領は次の如くである。

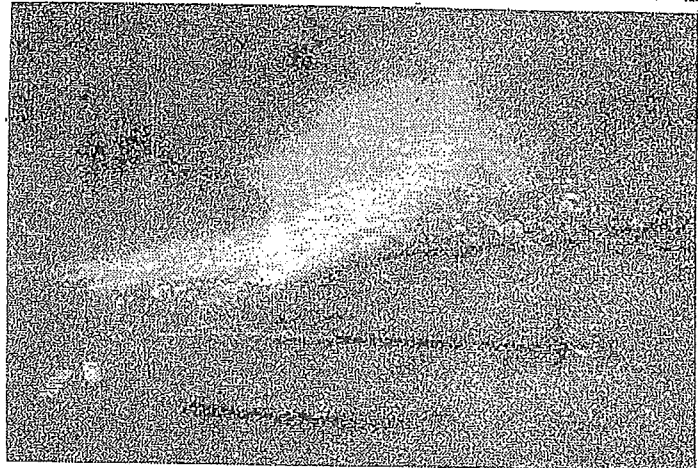
「海嘯の原因は一番最初大洋の沖合に於て或る廣範圍の地殻に陥没が起る。するとその陥没の爲め低くなつた場所に海水が周圍から忽ち集つて來る。集る勢で一點に相會して立ち上つた海水はその反動作用で更に周圍に大波紋を描いて押し擴がる。その波紋の先端が陸地に到達した時即ち海嘯の現象を起す。であるから今陸地に住んで居る人を本位にして考へる

も縷々警告を怠られなかつたやに聽いて

陸路一里餘、更に慘禍の中心釜石町に出た。山腹から眺めると、鑛山あり、製鐵所あり、釜石川を挟んで殷盛なる小都會をなして居るが、愈よ近づいて現場に足を踏み込むと、これ又實にむごたらしい慘禍の巻であつた。左右に倒壊、浸水、焼失、廢墟の如き被害の跡を訪ね乍ら釜石警察署に署に赴く。署には湯本學務部長、柳田官房主事、中野警務課長も出張

五、釜石町の慘害

よで打ち揚げたのか、これは酷い。」と初對面の暴君海嘯の威力に先づ度膽を抜かれた。三々伍々我家の在りし邊を右往左往して居る者、海岸の漂流物を漁つて居る者、何れ劣らぬ憫れなる罹災者の姿に強く胸を打たれる。唯當時適當な指導者があつて、避難が迅速に行はれた爲全部落を通じて死者僅かに三名にとどまつた事は不幸中の幸福であつた。



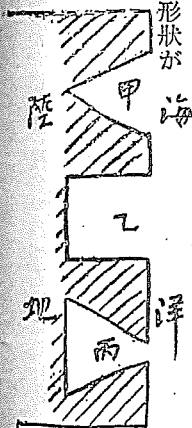
(影撮りよ上機行飛官務事務内井石) 況狀災火震町石釜

る様な忙しさである。海嘯襲來時の模様について各方面の實話を綜合すると、

『強震の直後、署長は直に水上派出所員に命じて海水の状況を監視させた。一方往年の災害に懲り、故老からよく教訓されて居る土地の若者等も亦海岸に焚火して海水の模様を監視して居た。然るに地震後凡そ十五分位経過せる頃果して異變は起つた。急激な潮騒と共に淺瀬の海底が露はになるばかり、海水が一時にザーツと引き去つた。スワこそとばかり海岸から「津波だ！、逃げろ！」の叫喚が起つた。街の警鐘は亂打された。町民は雨戸を蹴つて外に飛び出し山手へ駆け上つた。一瞬暗夜の洋上に物凄い大海嘯が襲來したのである。剩へ棧橋の邊にはサーチライトの如き不思議なる青色の閃光人々の眼を奪ひ、猛り狂ふ怒濤の中に早や海岸で人家の打ち碎かるゝ音が耳朶を打つ。恰度その時釜石町目抜の商店街にあたつて猛烈なる火災起り、火焰天に冲するも既に一面の泥海と化した現場に

とその順序は先づ第一に地震が起つて、次に海水が引き去り、次に海水が押し寄せて来る。地震の起るのは沖合に於て地殻の陥没した際である。

海水の引くのはその陥没の上部へ海水が集る爲である。海嘯はその大洋の彼方で相會した海水が更に四散して陸地に到達した際である。最近の實例としては、明治二十九年三陸大津波があつた。當時死者數百萬就中吉濱灣が被害最も激甚であつた。同所は灣の入口が廣く中が次第に細くV字型となつて居る爲め、被害の最も多かるべき地勢條件を具備して居る。海嘯に對する危険の大小は獨り灣の形状ばかりでなく、海水の深淺其の他とも種々複雑な關係はあるが、概して謂へば灣の形状が



の内、甲は被害最も多く乙は中位、丙は最も安全である。」といふことであつた。

四、鵜住居村兩石部落の流失

三月四日午後五時岩手縣廳を出發した自動車が險路笛吹峠を越して鵜住居村に到着したのは早や正午過、今回被害の現場に足跡を印した第一歩である。沿道の人家にはそれ〴〵避難者の一家族を收容して居ることゝ「何某家族」と書いた表の貼紙が眼につく。自動車は同村字兩石といふ海岸部落の入口に停つた。ドアを排した時、其處には洵に想像以上な驚くべき場合が展開されて居た。昨日の未明まで百戸に近い村落が太平洋に面して平和なる繁榮を續けて居たのであるが、今や一木一草を留めない砂丘と化した。住家の破片は一本の柱、一枚の板とバラバラに解體されたものが、海岸を去る四五



視害災の行一從侍金大使勒るけに村居住鵜 (影撮官務事務局會社田堀) 察

道路の所丈け車馬の通り得る様に取片付中である。この光景を目撃した瞬間、私は「此處まで海水が來たのか、そして多數の人家を滅茶メ々に打ち壊してこゝ

町の山峽まで波に乗つて押し揚げられ、道路、桑園、谷間一面にうづ高く堆積して通行を阻害したので消防組青年團員等が

同地は宮古町を去ること四五里、海上發動機船にて約一時間餘の航程である。六日朝丹羽社倉局長官、陸軍大臣代理谷少將の一行と共に再び前日の漣丸に便乗して銚崎港を出帆した。田老灣の沖合に來て漂流木材の多いのに驚く。つと見れ

ば小高き山麓に堂々たる小學校の校舍と寺院と、役場の外三四の人家を残すのみにて他は一木一草を止めざる茫々原始の砂原である。その廣袤は海岸線十五六町乃至二十町、海岸より山麓まで平均約五六町位に見受けた。こゝに三日前まで五

備考 死亡者及生死不明者合計九百三十名

大字名	家名	現在戸數	流失戸數	生存者	死亡者	生死不明者	救護者
田老	田老	三六二	三五七	一、五四四	四一五	三九八	
同	樫内	二四	四	一一			四
乙部	荒谷	六八	六五	三六〇	四	五	
同	青砂里	四六	四六	二六〇	二二	一五	
同	野原	二七	二七	五	三九	二二	
同	小港	四	四	二八	六		
同	水澤	一七	四	二	四		
同	下攝待	一三	三	一四			
計		五六一	五一〇	二、二二五	四九〇	四四〇	四

田老村海嘯被害調

(三月五日ニ判明ノ狀況)

千人に垂々とする人命を喪ふといふ大悲慘事を惹起したのであつた。

の揭示があつた。措辭は兎も角、即日應急の警告として洵に適切なもの、此の

- 一、流言蜚語を慎しむ事
- 一、生活必需品を値上するな
- 一、火氣取扱に注意の事
- 一、盜難を豫防する事

二月三日 釜石警察署

五日夕刻に至り漸く天候が恢復したので、捕鯨船漣丸に便乗して宮古に向ふ事が出来た。同船は今回被害地へ急派された東北大學病院、赤十字病院の診療班一行を宮古方面へ送る爲、警務課長の幹旋と船長の義侠的奉仕により特別に仕立てたものであつた。印象深い災害の釜石町におさらばをする時、エキゾチックな汽笛の音が灣内に響き渡れば、夕陽は薄化粧した岬の殘雪に映えて又となく美しいが、昨日來聴いた數々の慘話と陸上の光景を回想しては何となく涙ぐましい氣持となる。船が灣を出ると流石に太平洋の黒潮だ。甲板に頑張つて出来る丈け海上から沿岸の被害状況を視察しようと思つ

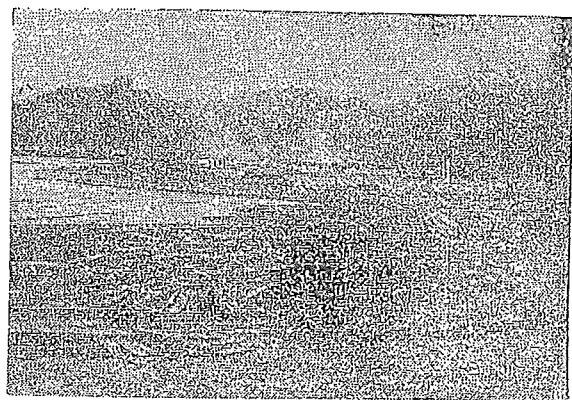
七、酸鼻の極、田老村

今次の災害中死傷の數が第一位でありその慘狀最も深刻を極めたものは田老村であつた。三月五日調の同村被害状況左表の通であつて、一村五百六十一戸の内五百十戸を流失し住民の約三分の一、一たけれども、大波のうねり、寒氣と動搖に居たまらずコン／＼と船室へ逃げ込んだ。夜に入つて風浪益々高まり船内で分八百屋の開店があつた。四時間以上暗い海上を難航してやつとのこと電燈の明るい銚ヶ崎に入港した。同じ海岸であり乍ら意外にも當地の被害は輕微である。これは三に於て紹介した通り地勢關係がよい條件に置かれて居たためであらう。一行の上陸後休憩した銚ヶ崎水上派出所が海嘯に乗つて押し上げられた漁船の激突により横腹の壁體を大部分破壊されて居るのに驚いた。

對して手の下しようもなく空しく傍觀するの外はなかつた。」といふことである。聽くだけに凄慘の極ではないか。夕方署を出で、町内被害の跡を具さに視察した。倒壊、焼失各二百戸、床上浸水千八百戸、火責め水責めの慘狀、目もあてられない。街路は到る處屋内より排出せる汚泥の堆積で惡臭が鼻を衝いて居る。唯當時官民一致して周到なる警戒のもとに避難が敏速に行はれた爲め、人命の損傷比較的少數に止つた事は兩石と同様何よりも幸であつた。町内到的所の電柱、又は船腹(街路側等に打揚げられたるもの)等に

時、此の場合、紙一枚の値千金である。夜は小學校に高橋校長を訪ね、避難の人々を見舞つた。

六、釜石より宮古に向ふ



(影撮官務事務局會社田堀) 況實の害災村老田

百餘戸の人家があり、三千餘人の老弱男女が楽しい團樂の生活本據を構へて居たとはどうして思はれよう。正に蒼桑の變、有爲轉變も餘りに甚しい。上陸後星宮古

署長の先導で役場まで數町の間砂漠の如き海濱を横切つて行く。何等視野を遮るものなければ、彼方此方に死體を發掘し

て居るのが一目に判る。先年本縣知事たりし丹羽社會局長官は默々としてその中を巡つて行かれる。つひ目の前で六七歳位な女子の蒼ざめた死體を掘り上げた。髪振り亂した四十女が彼方から狂氣の如く馳せつけて「もしッ、フミぢやねえかい？」と覗き込んだが、「違ふ〜。」と獨語して失望の體、餘りの痛々しさに「貴女は御子達を亡くされたのか」と言葉を懸けると「ハ、四人の子供を殺しちゃつた。二人丈は出たが（死體として）あとの二人はどこさ（何處へ）埋つて居るべし。……氣の毒で挨拶の言葉も出ない。更に驚くべきは墓地の光景である。何某と筆太に書いた棺（粗造の角箱）が無難作に横たへてあるはまだよいとして、杉木立の間に引取人のない幾十とも知れぬ生々しい死體が墓の上にすらつと並べてあるではないか。其處へ今發掘したばかりの死體が續々と擔架で運んで來て、陳列

されて行く。其處には親兄弟の死骸を探す血眼の人々が力ない足取りで右往左往して居る。偶々目的の死骸を發見した人々の「アッ、佛様が居つた……」その瞬間の歡喜と悲哀、安堵と失望の交錯した一種謂はれぬ表情、これは到底私の細叙するに忍びない所、讀者願はくばその場面を想像され度し。

八、非常警備計畫の眞價

災害地を視察し、警察官諸氏の献身的活動狀況を拜見して感謝に堪へないと同時に、今回災害警察上特筆大書すべきは非常警備計畫の收獲であつた、昨秋内務大臣より非常警備に關する訓令が發せられ、各府縣では災害、騷擾其の他非常事變に臨み特別警備の完璧を期すべき計畫を設定することゝなつて居る。計畫の具體的内容は警察上の機密である關係上、現在では少數幹部に於て取扱はれて居る

が幸にも岩手縣に於ては爾來警察部長中心となり、警務課長、同課主任等熱心研究の結果、稿を改むること四回既に昨年中にその計畫の完成を見るに至り殊に三陸沿岸海嘯の襲來まで想定した計畫が設定されて居たことは今から考へて洵に用意周到であつた。之が爲に今回の大災害に臨んで些の狼狽もなく、豫て熟慮研究立案した所の計畫に則り、終始一貫整然として一絲亂れざる警察力の統制運用を完了する事が出來た。例へば應援の敏活である。三日の未明、沿岸一帯の雷ならぬ被害情報が入ると共に、警察部に於ては被害地に接續した謂はゞ第二線第三線の警察署に對して直に召集命令を發した。斯くて糧食、旅費萬般の用意を整へた一定の要員は完全に集結を了つて待機中である。被害地から應援の要請があれば命令一下隨時、隨所に最寄の警察署から要員を急派することが出來た。而もその出

動にあつたの輸送計畫はこれ亦豫て細密に樹立されて居る。何某所有の何車庫所在自動車何臺に何人塔乗してどの路線を行くといつた調子、沼宮内署から岩泉署迄行程二十餘里、應援命令ありてより到達迄の所要時間僅かに三時間餘、而して警察官輸送に計畫されて居た車輛はその後引續き配給品送達等救護方面に專用されて絶大の貢獻をなした。一方宮古署長である。全滅の田老村から受持照井巡查の特使に持たせた災害第一報を受けとつたのが三日の午前十時、署長は急遽自らの出動を決意した。計畫によれば自身自身の糧食を携行すべきであるが、この場合自分の食ひ物などはどうでもよろしい。全滅の田老村には糧食が無い。怪我人もあらう。驚愕と飢と寒さに震へて居る者に對して何とか應急の救護が必要だ。糧食二千人の二分一斯く考へた署長は早速町内の米屋を呼んで白米三十俵に

味噌醬油、呉服屋を呼んで毛布寢具の若干を持ち出させ、病院に電話をかけて醫師、看護婦各一名、これ丈の物資と要員を積みこんだ發動機船が宮古灣の白波を蹴立て、出たのは三時間後であつた。これ等は何れも右計畫に基礎を置くものであつて正に計畫を基礎として、計畫以上の運用を見たといふ事が出來よう。視察の歸途縣廳に立寄つた際警務課主任阿部警部は、談偶々非常警備計畫の事に及ぶや、さも感慨に堪へざるものゝ如く、「非常變災に臨んで些の躊躇なく機宜の所置を講ずる事の出來たのは全く計畫のおかげでした。今回若しあの計畫なくしてこの變災に直面したならばどんな狼狽醜態を演じた事でしょう。」と語られた。

九、海嘯と避難

既に述べた如く海嘯は或程度に其の襲來を豫知する事が出來る。今回の實例に

徴しても之を豫知して適切に避難をした所はたとへ一村を擧げて家屋全滅の厄を免れ得なかつたにしても生命の損傷は殆んど皆無なるを得たのである。之に反して多數の死者行衛不明者を生じた方面は概して地震後の警戒に落度があり、避難の迅速適切を缺けるに由るものゝ様である。聞く所によれば多數の死傷を出した某地の駐在巡查の如きも地震の際一旦起き上つたが「津波の來る様な場合はもつと〜ひどい大地震があるだらうよ。」といふ附近住民の語らひに氣を許してそのまゝ再び寢床に入つた時、津波の驟となり、家族を先に避難させて自分は寢巻一つでぶ濡れとなり乍ら身を以つて遁れ出たが、官服は流失したので二三日消防組員の服を着て勤務し、戸口調査簿のなくなつた爲め被害調査に大支障を生じたといふ事である。不測の天災地變に遭遇して不眠不休の勤務に寢食を忘れつゝ

ある現在の心勢に對しては深甚の同情を
激ぐものであるが、今改めて、警察官と
しての行動の始終を冷静に省察する時、
果して批判の餘地がないであらうか？
深夜、その土地に於ては前例を知らぬと
いふ程度の強震があつた場合、一村治安
の全責任を負ふ駐在巡査は、たとへその
時間が休憩であらうがあるまいが少くと

も先づ制服に身を固むべきではないだら
うか。そして人心恟々たる部内を一巡し
被害の有無位は不取敢調査し置く必要が
あらう。更に古來著名なる海嘯慘害の歴
史を持つ土地などに於ては、二三元氣の
若者に命じて海水の引く模様でも監視さ
せ、異變を豫知して村人を避難せしめた
ならば、或は駐在巡査一人の注意によつ

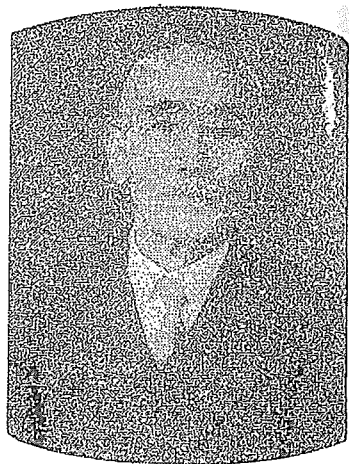
て數百の人命を完全に保護することが出
來たかも知れぬ。それもこれも今となつ
ては死兒の齡を數へる泣言の様だけれど
も、之を以つて他山の石とし前車の覆轍
を後車の戒としたい念願の外他意ない次
第である。

三陸地方等震災被害概況

(内務省警保局調査、昭和八年三月十五日後四時現在)

區別	人				家				屋				船		其ノ他	損害見積額 圓
	死者	傷者	行衛不明	計	流失	倒潰	燒失	浸水	計	流失	破損	破損ノ含 農作、家畜 山林等	破損	破損		
岩手	1,336	833	1,707	3,876	2,244	1,131	326	2,550	8,500	5,800	4,600	農作、家畜 山林等	4,600	4,600	10,800	10,800
宮城	1,170	1,150	1,264	3,584	2,500	586	1,510	2,996	8,296	3,300	3,300	船具、類具 魚雜等	3,300	3,300	1,000	1,000
青森	333	70	7	410	1,131	113	104	371	1,719	2,100	2,100	堤防欠潰、 乾魚流失等 (釀造酒)	2,100	2,100	1,000	1,000
北海道	233	50	7	300	1,131	113	104	371	1,719	2,100	2,100	堤防欠潰、 乾魚流失等 (釀造酒)	2,100	2,100	1,000	1,000
福島	1,136	1,136	1,136	3,408	1,136	1,136	1,136	1,136	3,408	1,136	1,136	堤防欠潰、 乾魚流失等 (釀造酒)	1,136	1,136	1,136	1,136
山形	1,136	1,136	1,136	3,408	1,136	1,136	1,136	1,136	3,408	1,136	1,136	堤防欠潰、 乾魚流失等 (釀造酒)	1,136	1,136	1,136	1,136
合計	1,336	833	1,707	3,876	2,244	1,131	326	2,550	8,500	5,800	4,600	農作、家畜 山林等	4,600	4,600	10,800	10,800

備考 「家屋」欄中官城縣は住家のみを掲載せり、農作物、家畜、山林等の被害は調査中に属す。



田口大分巡査部長の退職

—— 五十有餘年勤績 ——

昨年六月十六日我警察界を引退せられ
た大分縣巡査部長田口虎藏氏は、慶應元
年九月十日大分縣中津市金谷の士族に生
れ、明治十五年九月大分縣巡査を拜命、
同二十八年七月十七日巡査部長に昇進、
同三十七年十月十八日警察書記の新設さ
るゝや、自ら巡査部長を退き専ら會計事
務に専念し、大正四年三月三十一日警察
書記職に就任し、再び大分縣巡査を拜命
四日市警察會計巡査として勤務して居
られたが、昨年六月十六日巡査部長に
昇進月俸八十圓に昇給の上勇退さるゝま
で、同署に勤務すること十七年、

尙警察書記時代を通し實に五十一年有餘
一日の如く致々として克く其の職責を全
ふし、勤直、寡言、殊に會計事務に關し
ては最も克く精通し、他の模範として本
縣警察官の崇敬の的となり、同氏の退職
は内外共に非常に惜しまれてゐる。
同氏が會計巡査として四日市署に奉職
中の勤直振を一言すれば、氏は和氣清鷹
の神勅を乞ふた字佐神宮の鎮座まします
神苑内の自宅から四日市署まで五軒の道
を満十七年間毎日の如く徒歩で往復し通
した精力家である。又會計事務の外司法
警察官の取調たる訊問調書及聴取書、誤
字、脱字、捺印洩れ等に至るまで一々検
閲して遺漏なきを期せしめ、現行法規、警
察類典の綴替、寒天摺りから署内に於て
使用する紙繕まで自分で造り、他官署よ

り來る空封筒を裏返して巡査に渡す俸給
入れに、又廢棄處分となつた書類を裏返
して封筒を作り駐在巡査に使用せしむる
等全く二三人前の仕事を一人で片付け、
人間業とは思はれぬ精勵振りであつた。
其の反面外勤や駐在巡査が事件報告の爲
公用紙を貰ふ時等は可成嚴重であつた
爲め、無駄紙は一枚でも使ふ事は出來な
い。夏季煙突の火を點する爲めマツチを
署長以下に配付するに軸木を百本宛位計
算して渡すとか、署の裏庭に夏蜜柑がな
ると一々番號を記入して署員や給仕から
襲はれない様に警戒するとか、全く用意
周到な勤直振りは永く後輩の座右の銘と
するに足るものがある。

(大分縣警察部警務課報告)